

山頭火ふるさと館報

令和元年十月
第三号

あいさつ

山頭火が残したものと 令和の御代を迎えて

山頭火ふるさと館
館長 西田 稔

山頭火ふるさと館は、この十月七日で開館二周年を迎え、一昨年の開館以来、全国から多くの山頭火ファンにお越しいただき、入館者がこの八月で四万五千人を超えました。

お客様からいただいたアンケートや直接いただいたメッセージも四〇〇〇通を超えました。お客様からの声を読むと、山頭火が今を生きる人たちに様々な力を与えていることが伝わって参ります。昭和の芭蕉と言われた山頭火が新しい御代「令和」の時代に生きる私たちに残してくれたものは何でしょうか。

「まっすくな道でさみしい」山頭火の昭和四年一月の句ですが、「この句が私の心から離れず、この句をつくった山頭火に逢いたい」と本館を訪ねてきたという方がいらっしやいました。広島からいらっしやったその方は、まだ二十代の女性、

山頭火が大好きで、迷いがあつたときに山頭火の句を詠んで心を整えるのだと言っておられました。また、遠く富山県から来られた男性は、「大変な病気をしたが、山頭火の句を知って今の自分がある、生きる力をくれた山頭火に逢いたくて来た。」と言つて山頭火の句の前ですつとたたずんでおられました。そしてまた、一人老人ホームで生活しているという方からは、山頭火の自由律俳句は一人で生きる自分の支えになつていて、句を考えることが自分の生きがいであるということでした。

山頭火自身も生きる上での悩みを抱え、昭和十年に芭蕉や良寛、西行といった先人の足跡を訪ねる旅に出ています。その旅は八カ月に及ぶ長旅となり、一人どう生きていけばいいのか、その答えを求める旅の中で山頭火は句を作り続けました。

ふつふつと
いらぬとこも
山頭火

旅先となった福井県永平寺で詠んだ句です。蝶の姿を自分自身と重ねて詠んだこの句からは「蝶蝶が羽を広げてひらひらとあの永平寺の高い薨を飛び越えていった。」と山頭火が一つの関を超えたように感じられます。

そして「私は私である。芭蕉や良寛ではない。私は山頭火になりきればよろしいのである。自分を自分の自分として活かせば、それが私の道である。」彼はこう日記に記して帰途につくわけですが、自分のこれからの道を見つけたこの時の山頭火の思いは現在でも通じるものがあり

ます。
来年は山頭火没後八十年の年。一人自分を見つめ、孤高の旅を続けながらつくった彼の句は、令和の新しい時代においても多くの人の心を魅了することと思えます。



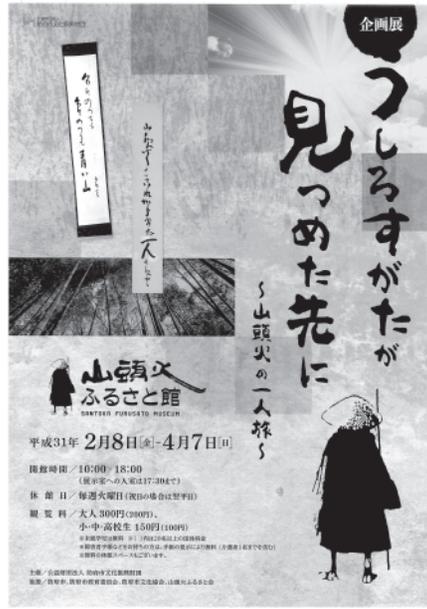
旧小林写真館本店 小林銀汀 撮影

目次

館長あいさつ	1
企画展「うしろすがたが見つめた先に」	2
企画展「山頭火を書いた現代人」	2
企画展「自然を詠む」	3
関連展示「田主誠版画展」	3
押花で絵手紙を作ろう!	3
第一回山頭火ふるさと館フォトコンテスト	4
山頭火・自由律句講座	4
山頭火への顕彰	5
今月の一句アーカイブ	5
収蔵資料紹介	6.7
山頭火の世界をスタンプで	8
今後の企画展情報	8

企画展
うしろすがたが見つめた先に
山頭火の一人旅

会期：平成三十一年二月八日(金)～
四月七日(日)



山頭火は人生の後半を旅と句作に生きました。大正十五年四月から山頭火の長い旅は始まります。

企画展では、山頭火が自分を見つめつけ、句作に生きる覚悟が見て取れる俳句を紹介しました。その一方、山頭火の訃報を受けて、自由律俳句の同人雑誌『層雲』に寄せられた追悼文から、人々は山頭火をどのように見ていたのかがわかる文章を紹介しました。そこには、山頭火の印象や、多くの仲間から慕われていた山頭火の姿が記されています。

ふるさとを去り、家族とも別れて俳句の道を生きた孤高の姿と、俳句のすばらしさを認める仲間恵まれ、慕われて、人を好み、人に好かれた姿、内からと外からの対比で見えてくる山頭火の姿を楽しんでいただきます。

ギャラリートーク：二月九日、三月二日、三月十六日
展示資料：【掛軸】種田山頭火「分け入つても分け入つても青い山」、【短冊】種田山頭火「炎天をいたいてをひあるく」、【掛軸】種田山頭火「木の芽草の芽あるきつづける」、【短冊】種田山頭火「山頭火もこれからまた一人」、【掛軸】種田山頭火「其中雪ふる一人として火を焚く」、【短冊】種田山頭火「竹の葉にかぜのひとりである」、【層雲】第三十巻第八号（昭和十五年）、同第九号（昭和十六年）、同第十号（昭和十六年）、『山頭火全集』第三卷（春陽堂書店、昭和六十一年）、『山頭火全集』第七卷（春陽堂書店、昭和六十二年）、一代句集『草木塔』（昭和十五年）

企画展
コレクション展示
山頭火を書いた現代人

会期：平成三十一年四月十三日(土)～
令和元年六月二十三日(日)



大正から昭和初期にかけて活躍した自由律俳人として知られる山頭火は、その生き方・俳句によって現代に生きる我々をも魅了します。

今回の企画展では、山頭火ブームの火付け役となった永六輔や、防府市にゆかりのある方々等、現代人七名を取り上げ、それらの人々が山頭火句を書画で表現した作品を展示しました。現代まで衰えない山頭火の魅力を身近に感じていただける展示となりました。

山頭火ブームの火付け役となった永六輔は自身も俳句を詠んでおり、山頭火の句に影響を受けたと考えられる句を掲載した句集や、防府で講演をされた際の新聞記事も展示しました。防府ゆかりの人物として鈴木淳、那須正幹、富永鳩山の三人、また絵画で表現した人物として藤川章造、秋山巖の二人、また山頭火との比較で書家の小田中喜水、秋山巖の二人を取り上げました。

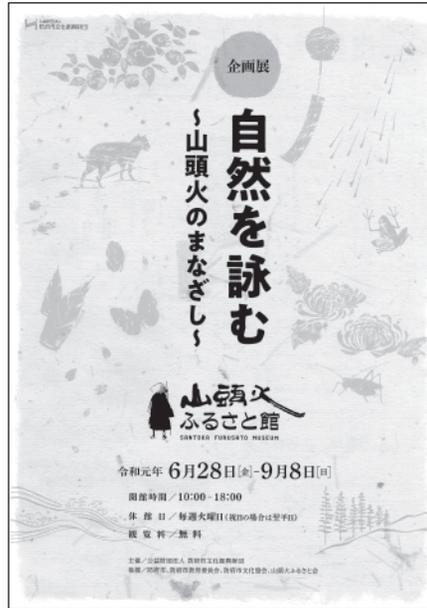
ギャラリートーク：四月二十日、五月十八日、六月十五日

展示作品：【色紙】永六輔「雨ふるふるさととははだしであるく」、【短冊額装】種田山頭火「雨ふるふるさととははだしであるく」、【色紙】永六輔「ちんぽこもおそろも湧いてあふれる湯」、永六輔「六輔五・七・五」（岩波書店、平成三十年）、「山頭火新聞」第十号（平成九年二月二十七日、防府日報）、【色紙】那須正幹「まっすぐな道でさみしい」、【色紙】鈴木淳「松風に明け暮の鐘撞いて」、【色紙】富永鳩山「ふくろうはふくろうでわたしはわたしでねむれない」（前期展示）、【色紙】富永鳩山「てふてふひらひらいらかをこえた」（個人蔵・後期展示）、【色紙】藤川章造「ほつと月がある東京に來ている」、【色紙】藤川章造「をとこべしをみなへしと咲きそろふべし」（個人蔵）、【色紙】藤川章造「もりもりもりあがる雲へあゆむ」（個人蔵）、秋山巖「板画・山頭火」（春陽堂書店、昭和六十二年）、【短冊】種田山頭火「分け入つても分け入つても青い山」、【色紙】小田中喜水「分け入つても分け入つても青い山」、【版画】秋山巖「分け入つても分け入つても青い山」

企画展 自然を詠む

山頭火のまなざし

会期：令和元年六月二十八日(金)～
九月八日(日)



山頭火は、自然を題材にした句を多く読んでいます。それらの句を詠むと、野山を歩く旅の途中や一人で暮らす庵で、自然を身近に感じ、慰められ、生きる力を得ていたことが伺えます。

この企画展では、山頭火が自然をどのように詠んでいるか、その「まなざし」をとおして、自然をどのように受け止めているかを考察しました。防府で活躍していた頃の句や山頭火の句集を読んだ学生時代の同級生からの絶賛文章を含め、身近な生き物や草花を詠んだ句や文章から自然に対する山頭火の思いが読み解ける展示内容となりました。

また、解説のパンフレットに「企画展クイズ」を掲載し、お子さんたちをはじめ、皆さんにより深く展示を楽しんでいただきたまします。

ギャラリートーク：七月六日、八月十日、九月七日
展示資料：【短冊】種田山頭火「こほろぎに鳴かれてばかり」、【短冊】種田山頭火「ひとりひつそり竹の子竹になる」、【短冊】種田山頭火「草は咲くがまゝのてふてふ」、句会原稿・席題「菊」(大正三年)、『層雲』第五卷第一号(大正四年)、『層雲』第二十五卷第二号(昭和十年)、第三句集『山行水行』(昭和十年)、第四句集『雑草風景』(昭和十一年)、第五句集『柿の葉』(昭和十二年)、『短冊』種田山頭火「笠へぼつとり椿だつた」、『層雲』第二十四卷第六号(昭和九年)、『層雲』第二十四卷第十二号(昭和十年)、『短冊』種田山頭火「枯草の中の花である」

関連展示 田主誠 版画展

会期：令和元年六月二十八日(日)～
八月三日(土) ※会期中展示替えあり

企画展「自然を詠む ～山頭火のまなざし～」関連展示

田主誠 版画展

たぬしまこと

●6月28日(金)～8月3日(土)
※毎週火曜休館
●10:00～18:00

●会期中展示替えあり
第一期 6月28日(金)～7月19日(水)
第二期 7月19日(木)～7月25日(火)
第三期 7月25日(水)～8月3日(土)

●観覧無料

会期中の企画展「自然を詠む～山頭火のまなざし～」に関連し、美術家・田主誠氏の作品を展示します。山頭火の句や短冊がモチーフになっており、文字から受け取る印象と似たような世界観が感じられます。企画展にちなんで、今回は、自然を詠んだ句を表現した作品を主に紹介いたします。企画展と合わせてぜひご覧ください。

田主誠 たぬしまこと
1942年 東京都府中市生まれ。1963年ジュニア美術新人賞受賞。国内の現代日本画壇、自然派が中心の「自然派」展、道中展、日本画壇展などで大賞および特別賞を受賞。2007年ジュニア美術新人賞受賞。2010年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2011年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2012年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2013年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2014年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2015年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2016年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2017年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2018年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2019年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2020年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2021年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2022年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2023年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2024年「日本画壇展」にて大賞を受賞。2025年「日本画壇展」にて大賞を受賞。

主催 (公財) 防府市文化振興財団
協賛 山頭火ふるさと館
協賛 防府市立図書館
協賛 防府市立美術館
協賛 防府市立博物館
協賛 防府市立生涯学習センター
協賛 防府市立公民館
協賛 防府市立体育館
協賛 防府市立市民会館
協賛 防府市立市民センター
協賛 防府市立市民ホール
協賛 防府市立市民会館
協賛 防府市立市民センター
協賛 防府市立市民ホール

企画展「自然を詠む」の関連展示として、舞鶴市出身の版画家・田主誠(たぬしまこと)氏の版画展を開催しました。自然を詠んだ山頭火の句の世界を版画で表現した作品計三十九点を展示しました。山頭火の姿を描い

押し花で絵手紙を作ろう!

て句の情景を表現したものだけでなく、自身の故郷の風景を描き、それに山頭火の句を入れた、山頭火と田主誠の表現した情景が重層的に伝わってくる作品もありました。文字から受ける印象とはまた違った山頭火の世界観を感じていただける展示となりました。

(出品協力 京都府舞鶴市)

令和元年五月四日(土)に開催しました。参加者は小学生五名。山頭火の姿を押し花で作成し「分け入っても分け入っても青い山」の句を入れた絵手紙と、あらかじめ用意した十句の中から好きな句を二つ選び、講師の見本に倣って句の情景を押し花で表現した絵手紙を作成しました。句の情景を表現した押し花はもちろん、句を筆ペンで葉書に書くなど、山頭火の句に親しむよい機会となったのではないのでしょうか。



第一回山頭火ふるさと館 フォトコンテスト

募集期間…平成三十一年三月一日～令和元年七月一日
表彰式 …令和元年八月四日
審査員 …鱧石洋己・入江孝治・西田稔
(敬称略)

山頭火の句をテーマにしたフォトコンテストを今年初めて開催しました。約四ヶ月の募集期間で県内外から九十二点の応募があり、その中から二十三点の作品が受賞しました。表彰式には十八名の受賞者が出席されました。結果は次のとおりです。



▶受賞作品(一部)

【最優秀賞】

藤田毅(山口県)
「ほうたるこいほうたるこいふるさとにきた」

【優秀賞】

佐伯範夫(島根県)
「ひとり山越えてまた山」
橘 千加(山口県)
「秋が来た雑草にすわる」

【佳作】

大脇雅志(岡山県)
「ふるさととはみかんのはなのにはふとき」

兼平潤子(山口県)

「まつすぐな道でさみしい」

黒木丸生(山口県)

「すすきのひかりさえぎるものなし」

富田弘子(山口県)

「歩きつづける彼岸花咲きつづける」中嶋隆広(山口県)

野村久美子(山口県)

「六十にして落ち着けないこゝろ海をわたる」

広田和夫(山口県)

「雪へ雪ふるしづけさにをる」

廣中作次(山口県)

「分け入つても分け入つても青い山」

町田充江(山口県)

「れいろうとして水鳥はつるむ」

【入選】

安部法隆(山口県)

「何が何やらみんな咲いてゐる」

大内正敏(山口県)

「ほろにがさもふるさとと露のとう」

大角尚武(山口県)

「れいろうとして水鳥はつるむ」

重永美智子(山口県)

「雨ふるふるさととははだしであるく」

坪郷盛也(山口県)

「この山の木も石も私をよう知つてゐる」

富田虎次郎(山口県)

「月が、まんまるい月が冬空」

野間元右(山口県)

「日さかりのお地藏さまの顔がにこにこ」

久光美保子(山口県)

「何やら咲いてゐる春のかたすみ」

実吉綾子(山口県)

「だまつてあそぶ鳥の一羽が花のなか」

吉野由恵(山口県)

「あなたを待つてゐる火のよう燃える」

山頭火・自由律句講座

山頭火を学ぶ会

令和元年六月十九日から毎月第三水曜日

令和元年度前期は、第一回目に当館館長の

西田稔による講話「山頭火と尾崎放哉」を開

催し、二回目以降は護国寺の橋本隆道住職、

山頭火ふるさと会会長の窪田耕二氏、当館学

芸員が、山頭火の俳句や日記についての講座

を開催しました。

自由律句を学ぶ会

令和元年六月十二日より毎月第二水曜日開

催(九月のみ第三水曜に実施)

令和元年度は十月までの五回を前期とし、

富永鳩山先生を講師に迎え、実際に自由律句

を作りながら、自由律句の解説をしていただ

いています。

自由律句で遊ぼう

令和元年六月二十二日より第四土曜日開催

(全八回、八月と十一月はお休み)

小中学生を対象とし

て、令和元年度は全八

回開催しています。自

由律句を作るほか、山

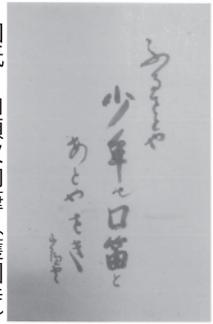
頭火の生涯をもとに紙

芝居を作ります。



山頭火への顕彰

護国寺 橋本隆道



和紙・山頭火肉筆(護国寺)

防府の地(八王子)で生誕した種田山頭火は明治(明治十五年生誕)・大正(大正十五年旅立)・

昭和(昭和十五年死亡)を生き、死後、約二十年前後から自由俳人として全国的に評価され、研究書の多くが出されました。地元では俳人としてではなく、乞食坊主として、軽んじられ、蔑んだ時代がありました。

しかし、文学通の先人が山頭火を慈しみ、十七回忌(昭和三十一年)に「俳人種田山頭火之墓」(兼崎地橙孫揮毫)が、そして句碑(八十余碑)や銅像・石像が建立され、ご供養と顕彰が継続されています。

文学ジャンルに対する関心が強くなるにしたがって、韻文界では「定型俳句」と「自由律俳句」に代表される俳人として、芭蕉・子規・山頭火(昭和の芭蕉の異名)が上げられ、今後、永久に評価されるだろうと言われています。

そして、山頭火ふるさと館(平成二十九年)が開館して、この地が発生地として、次ぎ次ぎと企画展が開かれ、人気とより一層の発展が期待されます。

山頭火は故郷への思いが強く、多くの「ふるさと」の句(二三八余句)を残しています。

- ふるさとは遠くして木の芽
- 雨ふるふるさとははだしであるく
- ふるさとの学校のからたちの花
- ふるさとの水を飲み水を浴び
- 何の草ともなく咲いてふるふるさとは
- ふるさとや少年の口笛とあとやさき

今月の一句 アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

平成三十一年 二月

ランブともせばわたしひとり影が大きく

昭和九年二月六日

写真がそれほど身近ではない当時、自分の影というものは、自分自身を目で見ることでできる数少ない手段のひとつでした。自分の影を観ながら静かに己の姿を見つめていた山頭火の姿が思い浮かぶようです。

三月

春風のテープもつれる別れもたのしく

昭和十三年三月二十日

船旅の見送りに紙テープを使って別れを惜しむ演出はこの当時すでに港の風景として定着していたようです。色とりどりの紙テープが風になびいている様子が華やかで楽しく見えたのでしょうか。

四月 春へ窓をひらく

昭和七年四月十一日

前後の日記を読むと、春の花や芽や風景を目にしてその美しさを味わいながら旅をしていたことがうかがえます。春の美しい景色を求めて窓を開くという希望に溢れた気持ちに詠まれている句です。

令和元年

五月 くもり、けふはわたしの草とりデー

昭和八年五月二日

草取りをしていると無心で手を動かしているうちに気持ちが晴れてくることがあります。晩春から初夏特有の憂うつや苦悩などを抱えていた山頭火は、「草とりデー」と軽やかに表現し、それらを払拭したのかもしれません。

六月 うまい水のながれるところ花うつぎ

昭和七年六月十七日

下関市にある狗留孫山修禪寺への参詣に出かけた際、道に迷ったことで山の空気と美味しい水を堪能し、気分が晴れたようです。また山頭火の句にうつきが出てくることは少なく、貴重な句です。

七月 小郡駅待合室

汽車がいつたりきたり

ざつとしていない子の暑いこと

昭和十年七月二十七日

当時の小郡駅(現・新山口駅)には現在の山陽本線、山口線、宇部線がすでに通っており、いくつもの汽車が行き来していたことが想像できます。多くの汽車が行きかう駅で小さな子どもが動き回る待合室の様子が描かれています。

八月 水底の太陽から釣りあげるひかり

昭和十年八月十八日

水底にある太陽に釣り糸を垂らし、その太陽の光そのものを釣り上げた、というような幻想的な比喻を用いることによって、川や魚や水しぶきがきらきらと光る、明るい情景が思い浮かぶ句となっています。

収蔵資料紹介

今回は、浴永不泣子宛て葉書五枚を紹介します。

翻刻

表 一、大正元年十一月十七日付

裏 防府町三田尻戎町
浴永不泣様

裏

毎々御手数数ヲ煩ハシ多謝々々 間ニ合フカドウカ覚束ナケ
レド御句ヲ左ニ
野分葉に何の虫鎌入不足いふ
十字街の野分寺読経太き聞く
野分名残を飛ぶ小鳥葦の枯れぐに
カラと晴れて野分跡柿赤う澄む
野分海の遠鳴も徹夜読む床に
十一月十七日夜 田螺公

表 二、大正元年十一月二十日付

裏 三田尻戎町
浴永不泣様

裏

本日は御邪魔いたし候 帰来早速五句集通読 左に五句を選び候
佳句の少きは遺憾に御座候 各自大に努力せざるべからずと
存じ候 天は附したれど地人は附するやうな句なしと信じ候
天 野分ヒタと静まれる木場の夕明り

野分夕風げる島雲に二日月
棕櫚剥ぐを児の樹下に居て背戸野分
浦惣出の貝吹くや野分漁長に

茶屋の倒れ松に語る旧道野分せり
これから当分蟄居 来月の句会は十中八九出席します、□□に
御尽力願上候 余は□□の折に譲り申し候

表 三、大正二年五月十三日付

裏 三田尻駅前戎町
浴永國助様

裏

一昨日は失敬いたし候 深夜に帰還
御無事なるにや 小生は飲み過ぎにて
昨日は一日曇り続け候

菜の花五句

氣だるさを凭るとなく花菜散る窓に
『わかれ』いひしが去りあへぬ花菜月夜なる
丘を曲れば花菜風霞む海見えて
構内そよろの花菜風汽車待つ間読む
散歩がてらポストまで花菜句ふ夜を
来月の十一日待□居り候 一夜会に
青嵐は必ず出句□□□□候
五月十三日朝 山頭火

表 四、大正二年六月五日付

裏 三田尻駅前戎町
浴永不泣様
山頭火

菜花妄選五句
△建つ家葺く家あり
御陵道菜の花に
△眠り足らぬを行く丘花菜
残月が
△校庭ヒソと掃き了へぬ
菜の花の夕
△物日めく人通り花菜
晴る土橋
△街道並木の足長や
菜の花の月

句会の「蛩」は誰へ送りましょうか

裏

□□失敬、麻郷行は予言した如く見合せねばならぬ破目になりました―

当分は

何も彼も

一切見合

はせませす、

孤独と沈

黙と思案

との生活―

さういう生活より外に

今の私が行くべき

道はありません、たゞ

句だけは作ります、

作れるか作れぬか

解りませんけれど

作るつもりで

あります

六月五日 夜

表五、大正二年六月十三日付

三田尻駅前
浴永國助様

裏

昨日は御邪魔いたし候

久々に快晴 心身晴々いたし候

何処かへ旅したくてたまらず候 然かし

これもちつとこらへてせつせと働らく

のがわが運命とあきらめ候

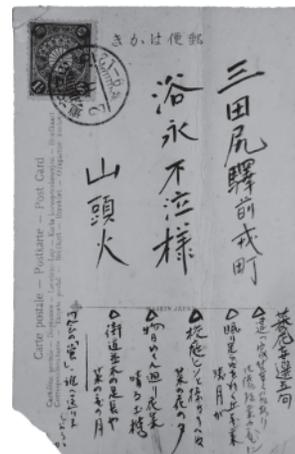
梅雨五句

苦しんだゞけ
拙い句となり候

不安夜すがら懐かしむ梅雨の異な虫も
臭木ほのと花咲けり梅雨の水舐めて

畳搔く土蟹に梅雨晴る日あり
捨捐を這ふ霧や山居梅雨晴れて
梅雨雲が刷く山の色車行飽かず見る
六月十三日朝 山頭火

四 大正二年六月五日付表



四 大正二年六月五日付裏



解説

浴永不泣子（えきながふきゆうし）は、明治末から大正五年にかけて山頭火が参加していた防府を中心とした俳句結社「椋鳥会（むくどりかい）」のメンバーであった。椋鳥会の雑誌『五句集』を見るとたびたび幹事として活動していたことから、椋鳥会の中心的存在であったと考えられる。

当時大道に住み、酒造場を経営していた山頭火は、たびたび不泣子に葉書を出していた。その内容はほとんど、椋鳥会の活動についてであり、これらの資料から当時の山頭火の様

子を窺い知ることができる。なお、山頭火は大正二年三月に俳号を「田螺公（でんらこう）」から「山頭火」に変えている①。椋鳥会の雑誌『五句集』は、回覧しながら各メンバーが句に投票し、評を付けていくというスタイルであった②。大正元年十一月十七日付の葉書は、『五句集 野分』の幹事であった不泣子へ、五句集へ投句する句を送った葉書と考えられる。同月二十日付の葉書では、『五句集 野分』から最も高い「天」の評価を付した五句を抜き出して書いており、また「各自大に努力せざるべからず」等と述べるなど、椋鳥会の俳句活動に熱心であった様子が分かる。

当時期、田布施町では江良碧松（えらへきしよう）が中心となつて一夜会という結社を作っていた。大正二年五月の葉書には「一夜会」という言葉が見え、また同年六月五日付の葉書には「麻郷行」を断念するという内容が見える。麻郷は一夜会が活動していた地域である。これらの資料から、防府の椋鳥会と田布施の一夜会が交流を持っていたことも推測できる。

さて、大正二年の葉書では、心境を吐露する箇所が見受けられる。大正二年は、自由律俳句雑誌『層雲』（明治四十四年創刊）にはじめて句が入選した年であり、それ以降、『層雲』には山頭火の句が多く掲載されることになる。しかし山頭火は、「孤独と沈黙と思案との生活」（六月五日付）を望み、「何処かへ旅したくてたまらず」（六月十三日付）という心境であった。それを「ちつとこらへて」「あきらめ」（同）ながら酒造場を経営していたが、それも長くは持たず、大正五年に酒造場は破産、妻子とともに熊本へ移住することになる。

① 種田山頭火「病床より」（大正二年二月号『五句集 梅』）
② 山頭火ふるさと館報第一号・第二号「収蔵資料紹介」を参照

山頭火の世界をスタンプで

山頭火や山頭火の句を彫った消しゴムスタンプを作成し、それを使った葉書や葉を当館に多数寄贈してくださっている方がいらつしやいます。いただいた葉書や葉は、来館者へのプレゼントとして活用しており、来館者のみなさまにも大変喜ばれています。

今回は、ご本人に、山頭火の句で消しゴムスタンプを作成されるにあたっての思いを語っていただきました。

田中 教也

私にとつての俳句、それは「古池や蛙飛び込む水の音」のみ。

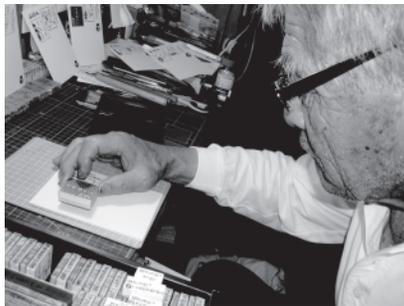
一昨年、実家に帰る途中『山頭火ふるさと館』の工事が着々と進んでいるのを見ました。妻に話したところ、山頭火の句集が五冊、私の机の上に置いてありました。読みました。明けても暮れても。

五十年前、私は大学を出て周囲の反対、特に両親の反対を押し切って造園の仕事に就いたもので山頭火の生き様は、まるで自分のようでした。

「すべつてころんで山がひっそり」

の句にイラストを添えてスタンプを彫ってみました。葉書に押ししてみると、じんわりとくるものが。それから

は、句に合った情景をイラストに描くのが楽しくて、気が付けば千句にもなっていました。一万二千句を残している山頭火、私のスタンプ作りはまだまだ続きます。



今後の企画展情報

周防三羽鳥 ～山頭火と白船・碧松～

会期 令和元年九月十三日(金)～

十二月八日(日)

自由律俳句の雑誌『層雲』の中で、主宰の萩原井泉水は、種田山頭火、久保白船(はくせん)、江良碧松(へきしよう)という山口県から投稿する三人の若者に着目し、「周防三羽鳥」と呼んでその才能を高く評価しました。この企画展では、山口県を代表するこの三人の自由律俳人とその作品を紹介します。

山頭火の書

会期 令和元年十二月十三日(金)～

令和二年三月八日(日)

種田山頭火は、自らの句を短冊や掛け軸に多く書き残しています。友人から頼まれて書くことも多く、残された書は筆づかいや書きぶりも様々で、それぞれに味わい深く、書によっても人々を魅了していたのがわかります。この企画展では、山頭火の直筆の書を紹介し、書き残された字から山頭火の思いを読み解きます。様々な表情を見せる山頭火の書をぜひご覧ください。

響き合うことば

～広がる俳句のイメージ～(仮)

会期 令和二年三月十三日(金)～

五月三十一日(日)

短いことばで表現する俳句をつくる中で、山頭火はさまざまな工夫を凝らしています。掛詞、比喻、連想など、ひとつの言葉で多様なイメージを喚起する表現がみられる句を紹介し、短い中にも広がりのある山頭火句の新たな魅力を発見します。同時に句の中から選んだ言葉のアンビグラム(さかさにしても読める文字アート)作品も展示予定です。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前十時から午後六時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで)

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料

無料

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅てんじんぐちから約一・五km

まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)

無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報
第3号
令和元年10月1日発行

編集・発行

(公財) 防府市文化振興財団

山頭火ふるさと館

〒747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

印刷

大村印刷株式会社

防府市西仁令一丁目21番55号